まいごのかぎ

斉藤倫 作
陣崎草子 絵

1 海ぞいの町に、ぱりっとしたシャツのような夏の風がふきぬけます。だけど、学校帰りの道を行くりいこは、うつむきがちなのです。

「またよけいなことをしちゃったな。」

りいこは、しょんぼりと歩きながら、つぶやきました。

2 三時間目の図工の時間に、みんなで学校のまわりの絵をかきました。りいこは、おとうふみたいな

こうしゃが、なんだかさびしかったので、その手前にかわいいうさぎをつけ足しました。そしたら、友だちが、くすくすわらったのです。

りいこは、はずかしくなって、あわてて白い絵の具をぬって、うさぎをけしました。そのとき、りいこの頭の中にたしかにいたはずのうさぎまで、どこにもいなくなった気がしたのです。うさぎに悪いことをしたなあ。思い出しているうちに、りいこは、どんどんうつむいていって、さいごは赤いランドセルだけが、歩いているように見えました。

3 ふと目に入ったガードレールの下のあたりに、かたむきかけた光がさしこんでいます。もじゃもじゃしたヤブガラシの中で、何かが、ちらっと光りました。

「何だろう。」

りいこが拾い上げると、それは、夏の日ざしをすいこんだような、

- 感想
- 絵の具
- 悪い
- ヤブガラシ
- 拾い上げる

こがね色のかぎでした。家のかぎよりは大きくて、手に持つほうが、しっぽみたいにくるんとまいています。

「落とし物かな。」

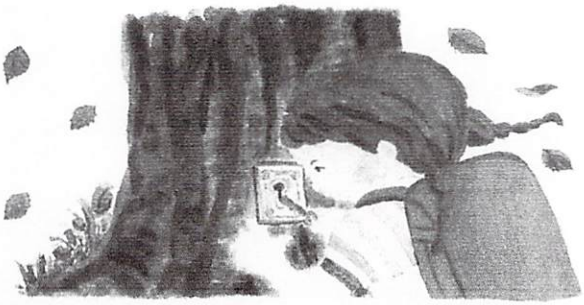
そう、小さく、声に出しました。すると、かぎは、りいこにまばたきするかのように光りました。

4 りいこは、元気を出して顔を上げました。落とした人が、きっとこまっているにちがいない。帰り道の方角とはべつの、海べにある交番に向かって、ゆるい坂を下りはじめました。

5 坂道にならんだいくつもの家をながめながら、このかぎは、どんな人が落としたのかなあと、りいこは、あれこれと思いうかべました。

6 通りぞいにある、大きなさくらの木は、青々とした葉ざくらになっていました。その木のねもとを見て、りいこは、びっくりしました。

- 持つ
- 向かう
- 坂



「あれは、何だろう。なんだかかぎあなみたい。」

7 しぜんに空いたあなではなく、ドアのかぎのように四角い金具が、みきについていて、そのまん中に円いあながあるのです。

「もしかして、さくらの木の落としたかぎだったりして。」

8 まさか、ね、と思いながら、持っていたかぎをさしこんでみます。すると、すいこまれるように入っていき、回すと、ガチャンと、音がしました。

- 金具
- 円い

「あっ。」

思わず、さけびました。木が、ぶるっとふるえたのです。そうして、えだの先に、みるみるたくさんのつぼみがついて、ふくらんでいったかと思うと、ばらばらと何かがふってきました。

「どんぐりだ。」

りいこは、悲鳴をあげます。さくらの木に、どんぐりの実がつくなんて。おさげの頭にコンコン当たるどんぐりを、ランドセルでふせぎながら、あわててかぎをぬきました。どんぐりの雨は、

ぴたりとやみ、さくらの木は、はじめの葉ざくらにもどっていました。

「びっくりした。」

りいこは、道の方に後ずさりしながら、言いました。

「こんなことになるなんて。さくらの木のかぎじゃなかったんだ。」

9 さらに下っていくと、公園があります。よく遊んでいる場所ですが、今日は、通りぬけるだけ。そのほうが、海べへの近道なのです。ところが、緑色のベンチの手すりに、小さなあなが空いているのです。

「なんだか、あれもかぎあなに見えるんだけど、そんなはずないよね。」

りいこは、だれにともなくつぶやいて、通りすぎようとします。けれど、ふと立ち止まってしまいました。

•悲鳴

「でも、もしかして——。」

10 カチンとかぎを回す音が、あたりにひびきました。ベンチは、四本のあしをぐいとのばし、大きな犬のように、せなかをそらしました。

「わあ。」

りいこは、ひっくり返りそうになりました。日かげにいたベンチは、のそのそと歩きだすと、公園のまん中の日だまりにねそべり、そのままねいきを立てはじめました。りいこは、びっくりして見ていましたが、しのびよると、

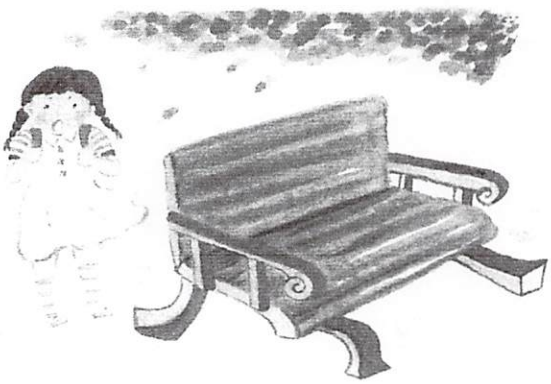
•歩道

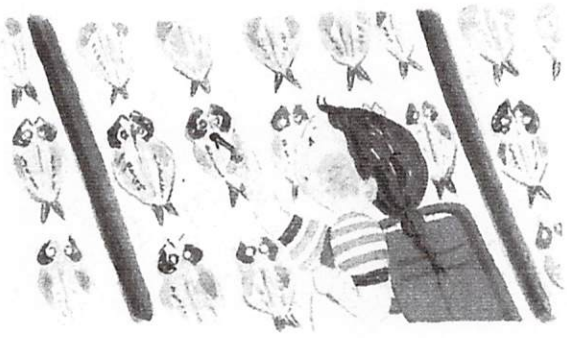
かぎをぬきとりました。ベンチは体をふるわせ、りいこの方を、なんだかうらめしそうにふり返ってから、元いた所に帰っていきました。

「ベンチのかぎでもないよね。歩くなんて、おかしいもの。」

りいこは、ためいきを一つついて公園を後にしました。坂を下ると、大きな国道にぶつかります。その向こうには、海がきらきらと光っています。

11 交番までは、もう少し。おうだん歩道をわたるとしおのかおりがしてきます。道のわき





にあみが立ててあり、魚の開きが一面にならべてありました。りょうしさんがあじのひものを作っているのです。そばを通るとき、中の一ぴきに、円いあなが空いているのに気がつきました。

「お魚に、かぎあななんて。」

12 へんだと思いながら、見れば見るほど、やはり、ただのあなではなさそうです。いつしかすいこまれるように、かぎをさしこんでいました。

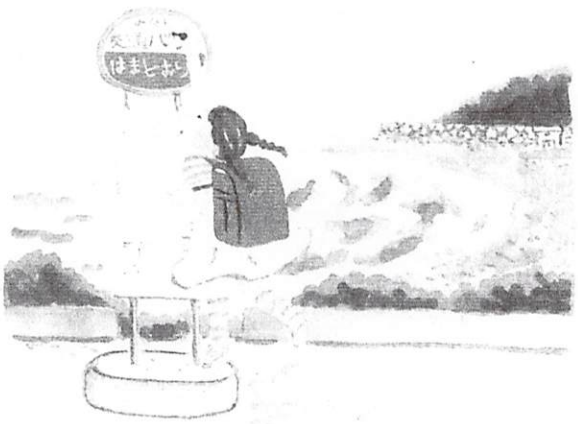
13 カチャッ。たちまち、あじの開きという字の「バ」の点が、なぜか三つあるのです。その一つが、かぎあなに見えました。

「どうしよう。」

りいこはまよいました。よけいなことはやめよう。そう思ったばかりです。そのとき、点の一つが、ぱちっとまたたきました。

「これで、さいごだからね。」

17 いつしかりいこは、かんばんの前でせのびをしていました。カチンと音がして、かぎが回りました。ところが、



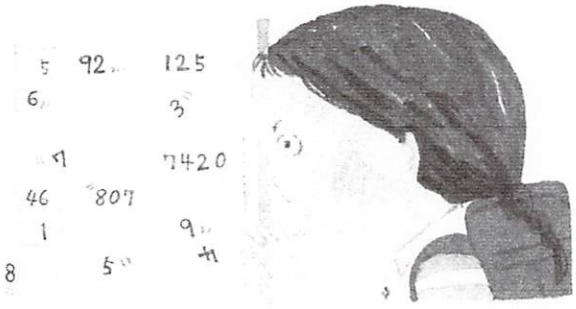
は、小さなかもめみたいに、はばたきはじめます。あっけにとられているうちに、あじは、目の前でふわふわとうかび上がりました。

14 りいこは、あわててとびつき、かぎを引きぬきました。開きは、元のあみの上に、ぽとりと落ちました。

「あぶない。海に帰っちゃうとこだった。」

15 わたし、やっぱりよけいなことばかりしてしまう。りいこは、悲しくなりました。早く交番にとどけよう。

16 海岸通りをいそぎはじめたとき、ふとバスていのかんばんが目に入りました。「バス」



何もおこりません。

18 ほっとしたような、がっかりしたような気持ちで、バスの時こく表を見て、りいこは「あっ。」と言いました。数字が、ありのように、ぞろぞろ動いているのです。五時九十二分とか、四十六時八百七分とか、とんでもないとうちゃく時間になっています。

「すごい。」

りいこは、目をかがやかせました。でも、すぐに、わくわくした自分がいやになりました。りいこは、かぎをぬき

とりました。

「あれ。どうして」

時こく表の数字は、元には、もどりませんでした。

19 りいこはふわくなって、にげるようにかけだしました。交番のある方へすなはまを横切ろうと、石だんを下りかけると、国道のずっと向こうから、車の音が聞こえてきます。ふり向くと、バスが十何台も、おだんごみたいにぎゅうぎゅうになって、やって来るのです。

20 「わたしが、時こく表をめちゃくちゃにしたせいだ。」

どうしよう。もう、交番にも行けない。

おまわりさんにしかられる。りいこは、かぎをぎゅっとにぎりしめて、立ちすくんでしまいました。

21 きみょうなことは、さらにおこりました。つながってきたバスが、りいこの前で止まり、クラクションを、ファ、ファ、ファーン、と、がっそうするように鳴らしたのです。そして、リズムに合わせて、くるくると、向きや順番をかえはじめました。りいこは、目をぱちぱちしながら、そのダンスに見とれていました。

22 「なんだか、とても楽しそう。」

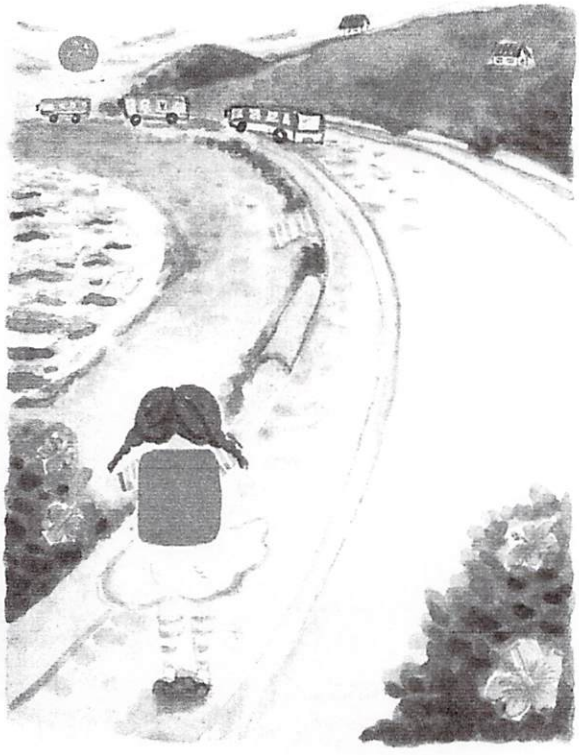
そして、はっと気づいたのです。もしかしたら、あのさくらの木も、楽しかったのかもしれない。どんぐりの実をつけ

たのは、きっと春がすぎても、みんなと遊びたかったからなんだ。ベンチも、たまには公園でねころびたいだろうし、あじだって、いちどは青い空をとびたかったんだ。

「みんなも、すきに走ってみたかったんだね。」

23 しばらくして、バスはまんぞくしたかのように、一台一台といつもの路線に帰っていきました。そのとき、一つのまどの中に、りいこはたしかに見たのです。図工の時間にけしてしまった、あのうさぎが、うれしそうにこちらに手をふっているのを。

24 りいこもうれしくなって、大きく手をふり返しました。にぎっていたはずのかぎは、いつのまにか、かげも形もなくなっていました。りいこは、夕日にそまりだした空の中で、いつまでも、その手をふりつづけていました。

5 路線

16 斉藤倫 一九六九年、秋田県生まれ。詩人、作家。「せなか町から、すっと」「どうだい」などの作品がある。